

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yubitsu (Porous Bodies) and Floating



南泰裕 MINAMI Yasuhiro

建築家、国土舘大学教授。1967年兵庫県生まれ。京都大学工学部建築学科卒業、東京大学大学院博士課程満期退学。1997年、アトリエ・アンプレックス設立。2007年、国土舘大学理工学部准教授。2012年、同教授。作品に「PARK HOUSE」ほか。著書に『住居はいかに可能か』（東京大学出版会）、『建築の還元』（青土社）ほか。

1991年から97年にかけて、6年間、原広司先生の研究室で
学び、~~6年間~~、大学院時代を過ごすのは08です。

大学院修士一年のとき、初めて参加した研究室会議で、
「対象では無く方法なのだ」と原先生が語ったのに、強烈
な衝撃を受けたのを、今もありがたきと覚えています。

原先生からは、本当に数多くのことを学びました。が、実は原
先生と、建築の話をしたことはほとんどありません。大半は、将棋
と700野球の話でした。あんなに、「建築とは、建築以外の全て
において描き出される何かなのだ。」という言葉を。

本展覧会の、原先生の、手の痕跡の、圧倒的な密度とつながり、
改めて、心打たれました。



2023/01/14
南 泰裕

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yūkūtai (Porous Bodies) and Floating



加藤 道夫 KATO Michio

東京大学名誉教授，東京理科大学客員教授，元文化庁国立近現代建築資料館主任建築資料調査官。著書に『ル・コルビュジエ 建築図が語る空間と時間』（丸善出版），論文に「火のないところに煙は立たずル・コルビュジエの原画に基づいて制作された東急文化会館の緞帳について」（NAMA紀要第2号）他。

加藤道夫

世界は雲のようで
つかみどころがない（混沌）
そんな世界の構造を
可視化しようと
彼は穴を穿っていった（有孔体）
2022年12月
図面とスケッチ群を一巡し（運動）
中央の建築模型に添えられた
有孔板の積層を透かして見たとき
彼が可視化しようとした世界が
見えた気がした（透明性）

原 広 司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:
What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yubitsai (Porous Bodies) and Floating



宇野 求

UNO Motomu

1980年 一級建築士事務所 設計組織アモルフ
共同設立、代表。1984年 一級建築士事務所
アトリエ・ファイ建築研究所勤務。1985年 一
級建築士事務所 フェイズ計画研究所設立、代表
。1994年 千葉大学工学部助教授、フェイズほ
かと共同。2007年- 東京理科大学工学部教授、
フェイズほかと共同

原広司から学んだいくつかの教え

「才能とは努力（を継続する力）だ」これは、丹下（健三）先生から原先生が学んだ言葉だとのこと。

「君は黙っていなさい」内田（祥哉）先生から学生時代の原先生が建築現場で教わった言葉。工事で後先に起こりうることを見通す眼を備えていない初学者は、まずは黙って様子を見ていることが大切。経験を重ねて学びなさいということ。

「建築設計コンペと麻雀は同じ。勝つまでやれば勝つ。」わかりやすい喩え。流れの中から運も味方にいい牌を引いて強い役を作り、機を見て勝負に出る心理戦だということ。

「離れて立つ」は、離散型集落の配置から読み取った至言。独立した多様なものの統一には、構成要素間の適切な距離が鍵ということ。建築にも人にも応用可能。

「研究しないで、どうやって新しい建築を造れるのか。」これは、現代日本の大学や建築家への問いかけ。

「伊藤邸」の図面から始まる膨大な資料群は建築に向かう独創的探索の記録であり、格闘の軌跡であり、可能世界を探る旅行記だ。人はそれらを見て難解というけれど、子供がこれら不思議なモデル、スケッチ、ドローイングに接すれば自由に想像力あふれる感想や質問を発するのではないか。新しいものには新しい言葉があるのだから、大人も分からないと言うだけでなくポジティブな言葉を考案するといい、これはなんだろう？と。現代建築家は魅惑や不思議な環境を局所に創作するプレイヤーで、建築は人から人へ部分から部分へと連なることだと展示総体は伝えている。

原広司が示したのは、建築家は探究の努力を続け、言葉を大切に、粘り強く、俗世との適度な距離感を保つことが大切で、建築の構想と造営は可能性と希望に向けた絶え間ない研究と実験だということ。

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yubintai (Porous Bodies) and Floating



Photo by KIKUCHI Kazuo
at OAK BLDG II

竹山 聖 TAKEYAMA Kiyoshi

1954年大阪府生まれ。1977年京都大学工学部建築学科卒業、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程（原広司研究室）に進学、1979年同博士課程進学、1984年退学。1992年京都大学助教授、2015年同教授、2020年京都大学名誉教授。1979年設計組織アモルフ創設、1983年株式会社に改組、1983-1992年および2020年-代表取締役。

世界を変革すること。
うさやわであつても、おもしろであつても、新しい世界を生み出すこと。
その方法と理論とを発見すること。

大なる建築も小なる建築も思想の表現という点において等しい。
むしろ偶想とある世界の、そこにあらわさる世界の、原理とを打ち明ける。

そんな姿勢と態度と志とを私に原広司から教わられたこと。
めづるにぬて強く強く思う。

2023年1月 竹山 聖



原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yuktous (Porous Bodies) and Floating



川向 正人

KAWAMUKAI Masato

1974年東京大学建築学科卒業、同大学院進学。1977-79年ウィーン大学美術史研究所留学。明治大学、東北工業大学を経て、1993年東京理科大学助教授、2002年同教授、2005年より東京理科大学・小布施町まちづくり研究所長兼務。2016年定年、東京理科大学名誉教授、小布施まちづくり研究所長。

（Ⅰ）徹底してリアルな教えとの出会い

「原さん」は、私にとって、同時代を生きる建築家と、大学に入ったばかりで右も左も分らない時期に「建築」を教えてくれた先生、という二つの像が重なり合う存在です。香川県出身の私は、テレビや新聞などに何度も登場し、何よりも建築「香川県庁舎」の設計者であった「丹下さん」の存在は知っていましたが、大学の学科の教員に「原広司」という建築家がいるということを知ったのは、入学後のことでした。だが、不思議なことに学内で出会うことがない。やがて、「生産研」というのがあって、そこにいらして、その研究室で授業が行われることを知ります。科目名は「現代建築」だったと思いますが、「研究室」を訪れて少人数の学生を対象に、原先生から、設計のこと、建築のことについて、直にお話を聴くことができるという、今考えると、その後の建築理解を決定づけられたかもしれない、極めて貴重な体験をします。体系づけられた講義というよりは、生の、設計と建築づくりの現場の話、「どう考えて、それをどう建築にするか」という、徹底してリアルな話。

時代は1970年代に入ったばかり、あれは、「建築に何が可能か」を問い、当時の原先生の「有孔体」の理論を、思索、設計、現場の印象深い出来事の形で、ときにはスケッチなどをまじえて語るものだったことを、今回の展示を拝見しながら、思い出します。

（Ⅱ）広がりゆく建築の地平

「無限定と限定」。この「無限定と限定」という、古代ギリシアの自然学・哲学にまで遡れる、ヨーロッパ思潮の背骨となる（対となり、絡み合う）概念を導入して、一気に我が国の建築思考の地平を欧米的で、普遍的でもある「広がりゆく」ものに変えようとしたのが、丹下健三だったとすれば、どんな事象にも先入観を捨てて「建築に何が可能か」とフラットにアプローチすることを説いた原さんは、その地平を継承し確かなものにすることに貢献した建築家・建築理論家だと言えるのではないか。どんな事象にもフラットにアプローチする姿勢は、隈（研吾）さんにも強く感じられますね。

この普遍的な建築思想の地平の継承者という意味では、原さんは磯崎（新）さんと比較可能ですが、磯崎さんは限定派であるのに対して、原さんは無限定派だと言えます。あくまでも古代ギリシア以来のヨーロッパ思想の中での「無限定と限定」の意味で。

今回の展示で、原さんの伊藤邸(1967)、慶松幼稚園(1967)が60年代末に現れ、70年代には一作ごとに相互につながりつつ新しくもある概念が提示されるのを見ると、誰もが「広がりゆく地平」を感じるのではないのでしょうか。

具体的に言えば、ライプニッツの「モノド」が原さんの建築の中で「空間＋空間境界（すなわち被覆）」と捉えなおされ、その空間境界が「有孔」から「反射」へと展開し、現代建築の最大の特徴となる「透過」を生み出す道筋を作るのも、この「広がりゆく地平」があったからでしょう。この地平のゆくえが、今後の建築界の大きな関心事でもあります。

原 広司

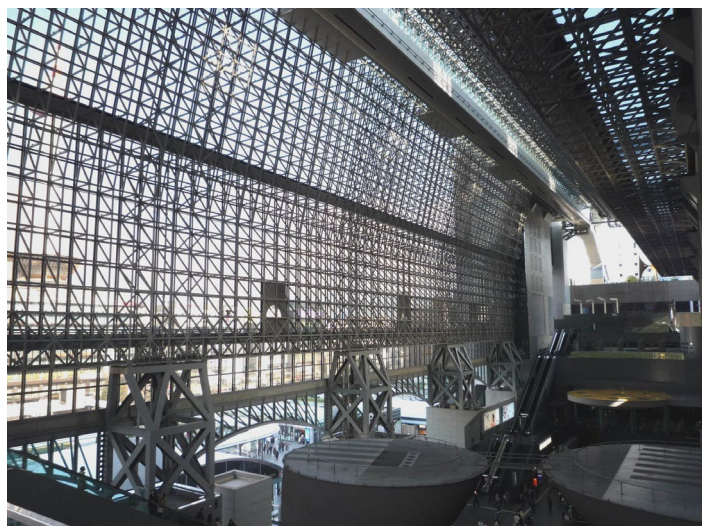
建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yubintai (Porous Bodies) and Floating



金箱 温春 KANEBAKO Yoshiharu

1953年長野県生まれ。横山建築構造設計事務所を経て、1992年金箱構造設計事務所を設立。東京工業大学特定教授。

アトリエ・ファイとの協働作品として、京都駅ビル(1997)、越後妻有交流館キナーレ(2000)、広島市立基町高等学校(2000)、みなと交流センター(2016)、慶松幼稚園(2017)など。

原先生とは構造設計者として多くのプロジェ
クトをござー織らせていただきました。さまざ
まな課題に対して根本に立ち返ってじつくり
と考える時間を共有させていたただいたことは
私にとってかけがえのない財産です。
物言の決定に際しての根底にある一貫した
思想や建築に対する揺るぎのない信頼を
感じることで、建築に立ち向かう勇気を与え
ていただきました。
本展覧会でも先生の思考の源や建築に対す
る信頼を改めて感じました。

金箱 温春

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi
What is Possible in Architecture?
55 Years of Ideas About Urban Form, Architecture, and Planning



(上)「失われた街」模型復元プロジェクト
photo:Jason Halayko

(左)気仙沼市復興祈念公園
photo:Takumi Ota

槻橋 修 TSUKIHASHI Osamu

富山県高岡市生まれ。神戸大学大学院工学研究科建築学専攻准教授、ティーハウス建築設計事務所主宰。2011年に発生した東日本大震災の支援活動としてはじめた『「失われた街」模型復元プロジェクト』が2015年日本建築学会賞（業績）共同受賞。主な作品に「南町田グランベリーパーク」（2019, 福岡孝則と共同）,「気仙沼市復興祈念公園」（2021）,「NATURE STUDIO」（2022）などがある。2022年より神戸大学減災デザインセンター センター長。

Born in Takaoka City, Toyama Prefecture. Associate professor, Kobe University(Dr. of Eng.), President of ARCHITECTS TEEHOUSE. Received the 2015 Architectural Institute of Japan Award (Achievement) for ”LOST HOMES PROJECT”, which was started as a support activity for the Great East Japan Earthquake in 2011. His umajor works inclde “Minami Machida Grandberry Park” (2019, jointly with Takanori Fukuoka), “Kesenuma Reconstruction Memorial Park” (2021), and “NATURE STUDIO” (2022). From 2022, he is Director of Kobe University Center for Resilient Design.

今から30年前の1992年に原研究室に入り、大学院生、目方として10年間と東大生協技術研究所で過ごしたあと、仙台で6年半、2009年のおわりから神戸の地に移りました。
2011年3月11日、東日本大震災が東北の地を襲いました。「建築は希望だ」という原先生の教えも胸に、建物や街が破壊された光景の中、希望を見出し、という思いから、学生や仲間たちと「失われた街」模型復元プロジェクトを無我夢中ではじめました。
その年の秋に機会がありTOTOチャリ間にて12の被災した街の震災前の姿を縮尺1/500、1M×1Mの模型で復元し展示しました。
展覧会が始まる前日の晩、原先生が会場にお来下さり案内をいいるときに、はじめて私が原研究生で携わった「500M×500M×500M」プロジェクトが縮尺1/500、1M四方のドローイングで表現された理由、世界集落調査で数多くの集落も同時に見ようとする理由を理解できた気がしたのです。私は思わず隣に立つ原先生に向かい、「先生、これは私が先生から学んだことの成果です。」と言っていました。私の思い込みかもしれませんが、500Mプロジェクトも、集落調査も、そこに有孔体と浮遊の思想も、すべて「建築の希望」に至る挑戦であったのだと思えます。

槻橋 修

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hirosaki
What is Possible in Architecture?
55 Years of Ideas About Volume (Form, Body) and Floating



代表作：象の鼻パーク／テラス



小泉雅生 KOIZUMI Masao

建築家／東京都立大学大学院教授／小泉アトリエ 主宰

学校建築、ホール、環境配慮建築を主軸に、住宅から公共建築、広場、まちづくりまで幅広く手がける。主な作品に、「アシタノイエ」、「象の鼻パーク／テラス」、「LCCM住宅デモンストレーション棟」、「港南区総合庁舎」など。主な著書に『環境建築私論』（建築技術）など。

かつてアトリエに伺った際、南米の
モンテビデオへのプロジェクトに関わる
原先生自身による膨大な手書き図面
の束に圧倒された。

「建築に何が可能か」という問いは
建築家として何をなすべきか、その
姿勢に対する問いでもあったように
思う。

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yubintai (Porous Bodies) and Floating



門内 輝行 MONNAI Teruyuki

1973年京都大学工学部建築学科卒業、1975年東京大学大学院修士課程修了、1977年同博士課程中退、東京大学生産技術研究所助手（1979年-1989年原広司研究室）、1989年早稲田大学理工学部助教授、1997年同教授を経て、2004年京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授。2016年京都大学名誉教授、大阪芸術大学芸術学部建築学科教授（2017年より同学科長）。京都市立芸術大学客員教授。学位論文「街並みの景観に関する記号学的研究」により、日本建築学会賞（論文）を受賞。

私が原研究室に在籍したのは、1979年4月～1989年3月の10年間である。今回の展覧会の時代区分で言えば、「公共建築と様相論」の時代である。ちょうど第5回集落調査が終わり、西アフリカのサバンナの穀倉群の建築言語の分析をされていた頃、建築的記号の成分分析の手法について、原先生と話をしたことをよく覚えている。そのことが契機となって、日本の伝統的街並みの調査研究を開始し、200カ所の現地調査を行い、「街並みの景観に関する記号学的研究」をまとめることができたのは、このときの原先生の言葉の力に後押しされたお陰であると認識している。

1980年代は、飯田市美術博物館、ヤマトインターナショナルなど、建築のスケールが飛躍的に拡張するとともに、意識の覗き込みを試みた影のロボット、パリやケルンの国際設計競技、500m立方の未来都市などのプロジェクトも展開し、多岐にわたる活動が繰り広げられた時代である。この間、領域、境界、様相、経路、記号場、情景図式、可能世界、多層構造などをめぐって、繰り返し議論をしたことが想起される。

今回の展覧会では、手描きのスケッチや図面が大きな魅力であるが、会場の中心を占める「有孔体と浮遊の思想」を表現するコンセプト・モデルが目を引き。よく見ると、①空と大地が表現され、雲・山・谷などの自然が組み込まれている、②それらの間に存在するマルチスケールの建築から特徴的な記号群が抽出され、有孔体レリーフの近傍にコンパクトに配列されている、③視点の取り方によって、自然と建築が様々なかたちで重なり合い、世界風景の様相が浮かび上がってくる。特に所々で使われている「親自然的」という言葉には、生命や環境に対する深い省察が込められており、それが色濃く反映されたモデルである。いずれにしても、建築思想を言葉ではなく、空間や図式を含むモデルで表現する卓越した試みである。

この「思想」のモデル、「構想」を示すスケッチ、「実現」を表示する図面・写真が三層構造をなし、そこに編年的な配列が加わって、見事な展覧会が構成されている。これらの展示物の間を彷徨する中で、論理と感性、決定性と偶発性を結ぶ理論と実践を横断する55年に及ぶ創造的な記号過程が浮かび上がる仕掛けとなっている。

建築・都市記号論の研究に携わってきた立場からすれば、原先生の建築思想は、場の理論、位相空間論、現象学、記号論などの幅広い学問の探求、世界の集落調査や数多くの建築・都市設計の実践などを通じて醸成されたものであり、大きな射程を持つ建築理論の基礎をなすものだと考える。「ずっと遠くの未来を見据えて、人間の歴史の中でどのようなものをつくるかを意識すること」という原先生の言葉が記憶に残っている。自らの仕事をより大きな世界に位置付ける構えの大切さを指摘したものである。今回の展覧会を見て、設計原理を“もの”から“こと”へと転換する「空間の文法」の体系化は、継承すべき枢要な課題であると改めて認識した次第である。

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yubintai (Porous Bodies) and Floating



©Shunji Yamanaka

今井 公太郎 IMAI Kotaro

2013年～ 東京大学生産技術研究所 教授。
2018年からデジタル技術を用いたセルフビルド
実験住宅を研究。2019年に初号機PENTA-
HARDが完成。2019年より伊豆市に津波避難複
合施設を設計、2022年より着工。

原先生の構想には、いつも Fantastic な
夢を感じます。その意味で、私にとりては、
未完のコンペ案や 500×500×500m の
プロジェクトこそが、次を考える上での
道標です。夢の構想と実現が極めて
現実的なディテールと共に緻密に構築
されている。生の資料の持つ迫力を
ストレートに感じられる展覧会です。
続きの展覧会も今から楽しみにして
あります。

今井公太郎

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yubintai (Porous Bodies) and Floating



及川 清昭 OIKAWA Kiyooki

1953年 岩手県生まれ。1976年 東京大学工学部建築学科卒業。建築設計事務所勤務を経て1984年同大学大学院博士課程（原研究室）修了。東京大学生産技術研究所助手（原・藤井研究室）・特別研究員を経て、1999年 東京大学院新領域創成科学研究科助教授。2003年 立命館大学理工学部教授。2019年より同大学理工学部特命教授・名誉教授。

私が原研究室で学び始めてから四十一年以上経ちましたが、原先生には、立命館大学での毎年の講演で、今なお数多くの教えを頂いております。

今回の展覧会では、驚嘆すべき膨大かつ密度の濃い建築資料が展示されていますが、それらに加えて、原先生から学ぶべきことは、世界の集落をはじめ、建築理論、空間思潮、数理的論者と解析手法、文学空間モデル等々、途方もない量に及びます。

建築学の必読書とされる原先生の著書『集落の教え100』の帯には、大江健三郎氏が原先生を「老賢者／理論家」として紹介されておられました。老賢者の原先生が紡ぎ出す言葉で数式を理解するには、並外れた知識と構想力が必要であり、これかろうとずと学び続けたいかねばならないと痛感しています。

及川清昭

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yubintai (Porous Bodies) and Floating



太田 浩史 Hiroshi Ota

建築家／ヌーブ代表

1968年生まれ。博士(工学)。東京大学大学院修士課程修了。東京大学生産技術研究所の助手、研究員、講師を務めた後、2015年よりヌーブ代表。作品に「PopulouSCAPE」(2005)、「ピクノポリス」(2008)、「矢吹町第一区自治会館」(2016)、「南阿蘇鉄道高森駅」(2018-)。共著に『世界のSSD100』(2008)、『シビックプライド』(2009)など

1991年から原研究室で2年学んだ後、東京大学キャンパス計画室の助手として原先生のもとで4年間働かせていただき、独立後も500m立方や天津のコンパなど、数えきれないほどの時間を一緒に過ごさせていただきました。大学セミナーハウスのプロジェクトで設計のすべてを教わったこと、明け方までスタジオロックスのDVDを観たこと、ノバの音楽の旅に同行させていただいたこと、何もかもが私の芯となっています。

今回、とりわけ懐い思ったのは、ドローイングのなかの無数の消しゴムの痕跡です。シンと静まりかえった夜中のアトリエ中で、先生がタバコをくゆらせながら鉛筆でスケッチを描き、時折手を止め消しゴムで線をゴシゴシ消すと、そのカスを弟子の私たちが黙ってブラシで掃くのです(タバコの灰にも同じ動作が繰り返されます)。そんな厳格な儀式のような時間を幾度も重ね、ドローイングは思考であると、私たちは学ぶのでした。

先生の設計プロセスは、ボリューム配置を1/200のスケールで、そこから詰めて1/100の平面図を行い、1/50の展開図で空間要素を調整するというものでした。ドローイングは展開図の全てに対して行われるので、数は当然、多くなります。有孔体の理論を考えると、内部空間は大事だから、中景がドローイングの中心になるのは理に適います。

しかし、ヤマトインターナショナルや梅田スカイビルなど、先生の建築は(しばしば遠景によって特徴づけられます)。となると、遠景のドローイングがもとよりそうなのですが、私はあまり見た事がないのです(梅田スカイビルの美しいドローイングは、設計後に描かれたような)。少なくともセミナーハウスでは、遠景はほとんど描かれることなく設計が終わり、現場の足場が取り、建物を50m、100mの距離で見はじめ、先生が考えた空間を、私は理解したのでした。

今思えば、あまり描かれなかった遠景こそ、最も大切な設計対象でありながら、近くにいた私には感知するのが難しく、先生にとって伝えるのが難しかったものなのかもしれません。それを言語で表現するための集落論、様相論なのですが、例えば今回の大瀬中学校のドローイングの豊饒を、身はずかしながら、私は上手く表せません。

具体的な中景の先に、遠景を捉えること。その遠景を伝える術を探ること。これは時間にも適用されて、今と最近の先に、未来と過去を遠く捉え、その解釈を試みること。私が先生から学んだことともの凄く圧迫されると、このようになります。一緒に過ごさせていただいた時間と空間を手がかりに、私なりの遠景を描きたいと思っています。

2023年2月3日

太田 浩史

原 広司

建築に何が可能か

有孔体と浮遊の思想の55年

HARA Hiroshi:

What is Possible in Architecture?

55 Years of Ideas About Yubintai (Porous Bodies) and Floating



大河内 学 OKOCHI Manabu

1967東京都生まれ。1992東京都立大学工学部建築学科卒業。1997東京大学大学院建築学専攻博士課程修了。1997-1998原広司+アトリエ・ファイ建築研究所。1998-2002東京大学生産技術研究所助手。1999-インタースペース・アーキテクト設立・主宰。2002-2006明治大学理工学部建築学科専任講師。2006-2016同准教授。2016-同教授。主な作品に「西原の階段長屋」,「Double Cube」など,著書に「ルイスバラガン 建築の読解」(彰国社),「建築のデザインコンセプト」(彰国社)。

静かに問いかける思考の軌跡、

学生時代から東大生研助手の職を辞するまで足掛け9年に渡り原先生の下で勉強させて頂いた。その当時、原先生は「京都陽ビル」や「500m×500m×500m Cube」,「地球外建築」などのプロジェクトに取り組まれていた。毎日徹夜をしながら素晴らしい集中力で黙々とスケッチを描き続けておられた。そのお姿が今も瞳に浮かぶ。

先生は、設計については何かと具体的に教えて下さるかわけが、スケッチに描かれたこと、時折独り言のように呟くことを通じて「建築において何を考えるべきか」を私たち弟子に教えて

下さったように思う。今日、それから二十数年の歳月を経て、改めて、先生が膨大な時間をかけて描かれた思考の軌跡を目にした。やはり、それらは昔と変わらず「建築において何を考えるべきか」を私たちに静かに問いかけていた。